

変成をもたらすもの、変成がもたらすもの 太田真理

——「をとめ」をめぐる表現世界——

三年丙寅秋九月十五日幸於播磨國印南野時笠朝臣金村

作歌一首 并短歌

名寸隅の舟瀬ゆ見ゆる淡路島松帆の浦に朝なぎに玉藻
刈りつつ夕なぎに藻塩焼きつつ海人娘子ありとは聞け
ど見に行かむよしのなければますらをの心はなしにた
わやめの思ひたわみてたもとほり我はそ恋ふる船楫を
なみ

⑥九三三

玉藻刈る海人娘子ども見に行かむ船楫もがも波高くとも

⑥九三六

行き廻り見とも飽かめや名寸隅の船瀬の浜にしきる白波

⑥九三七

一 はじめに

冒頭にあげたのは笠金村の「印南野行幸歌」と呼ばれる歌である。題詞にある「三年丙寅」は、神龜三（七二六）年にあたる。『統日本紀』に照らすと、

神龜三年秋九月壬寅（二十七日）、以正四位上入部王（中略）等二十七人、為「装束司」、以「従四位下門部王（中略）」

等一十八人、為「造頓官司」、為「将」幸「播磨國印南野」。「冬十月辛亥（七日）行「幸播磨國印南野」。「甲寅（十日）至「印南野邑美頓宮」。「癸亥（十九日）還「難波宮」」

（以上『統日本紀卷第九』／括弧内日付注・太田）
とあるように行幸は九月ではなく十月であり、題詞とは齟齬がある。諸説あり定まっていけないが、「九月十五日」は行幸の詔勅が出された日などと考察される。

印南野は現在の兵庫県明石から加古川にかけての平野で、当時の瀬戸内海航路における重要な泊の一つであった。名寸隅は、明石市西端の魚住町付近といわれ、『類聚三代格』（卷十六）に「魚住船瀬」とあるのはこの地とされる。

「淡路島松帆の浦」は、「名寸隅」から播磨灘の明石海峡を隔てた淡路島の北端付近の海岸で、風待ち・潮待ちの港であり、歌枕としてしばしば和歌に詠まれている。その際、（ア）ハヂ↓逢ふ、マツホ↓待つ）の掛詞として用いられることが多かった。その地に「ありとは聞」く海人娘子を「見に行かむよし」が無いとは、①そこに行く手段がない——行きたいが行く方法（舟）がないという説と、②そこに行く理由がない——官人ゆえ行幸の

旅の間は勝手な行動はできないという説がある。ここは長歌の最後部、第一反歌に「舟楫をなみ」「舟楫もがも」とあることから、①ととるのが自然と考える。

第一反歌では、「見に行かむ」の「む」の解釈について、①意志・終止（窪田評釋）と、②意志・連体（全註釋以下諸注釈）の二説がある。①とした場合歌は三句切れとなり、かつ第四・第五句がそれぞれ独立する形で「海人娘子を見に行こう」という海人娘子への興味関心を強調することとなる。その解釈も無視できないように思われるが、長歌の「見に行かむよしのなければ」（意志・連体）との対応からも、②と解釈するのが適当であろう。全体を通してみると、長歌の歌い出しでは行幸従駕歌にふさわしく「名寸隅の舟瀬」「淡路島 松帆の浦」と行幸の地とその対岸の地名を列挙することで、国土讚美の基本形を押さええているようである。ところがその関心はその地に「ありとは聞」く「海人娘子」に移行し、「見に行きたいけれど行かれない」と、強い願望と屈折を詠む。続く第一反歌では「波高くとも」と海人娘子への願望をさらに高めるが、第二反歌では視線を眼前の浜に反転させ、「見とも飽かめや」という讚美表現で詠みおさめている。視点・関心の移動をまとめると、長歌で名寸隅の舟瀬↓淡路島松帆の浦↓（海人娘子）へと遠ざかった視点が、反歌では（海人娘子）↓名寸隅の舟瀬の浜へと回帰しているのである。

このような構造を持つ当該歌は、国土讚美を基本とする行幸歌のあり方と、「海人娘子」を見たいと希求する相聞表現としての歌のあり方の間で評価が揺れている。その鍵となっている

のは、「海人娘子」に対する思いをどう捉えるかであった。しかし注目すべきは、最終的に「浜に寄せる波」を讚美する点にあるのではないか。その波は「海人娘子」への視点・関心の移動とともに足元の浜に寄せている。「海人娘子」とはそもそもどんな存在なのか、「海人娘子」のいるとされる対岸の淡路島から寄せてくる波はどのような意味を持つのか。眼前の景が「海人娘子」のいる世界と波によって繋がれることで、ある「変成」を遂げているのではないかという観点から当該歌の意義を問い直したい。

二 研究史

はじめに、当該歌の研究史を確認する。清水克彦氏は、淡路島の松帆の浦で玉藻を刈り、藻塩を焼く海人娘子を見に行きたいという、「我れ」の私的な願望が歌われている。もともと、この作品は、長歌の冒頭に述べられていた作者の現在地、「名寸隅の船瀬の浜」に「しきる白波」を賞美する内容の歌「九三七」で結ばれており、その為に全篇が景賞美の性格を持ち、海人娘子も、松帆の浦の美景を構成する為の、いわば中心的景物としての意味を持つもののようなでもある。おそらくはそう解釈すべきで、この点でこの歌は危うく公的な行幸従駕歌に止まり得たのであろう¹⁾。

と述べた。海人娘子への私的願望の存在を認めながらも、あくまでも国土讚美という行幸従駕歌の基本を踏まえた歌と解釈し評価する。しかしこの後、「私的な願望」の相聞性が行幸従駕

歌に不相応と捉えられ、歌の意義を問いなおす論が行われることとなった。

村田正博氏は、当該歌の根底に「ナビヅマ（隠妻）伝説」があるとし、

土地の伝説をとりあげて作歌することは、ひいては、その土地の由緒を認め、讚美することにつながるはずだ（伊藤『万葉集の歌人と作品 上』一八七ページ参照）。だからこそ、海人娘子への憧憬をうたう長歌や第一反歌の詞句を承け、

往廻り見とも飽かめや名寸隅の船瀬の浜にしきる白波

（6・九三七）

という、土地の好景をたたえる結びの歌がスムーズに詠み出されたのだと思う。このように解するとき、この金村の長・反歌が行幸従駕の歌として十分に機能するものであったことは、ほぼたしかだと言いうことができよう。

と、行幸の地における「讚歌性」を見出す。清原和義氏は、

実体験としての特定の女性ではなく想念の人として「海人娘子」を歌うところに、かえってその場の一般に共有できる具象性を伴っていると思われる。まさに個人の感慨の詠歌ではない、宮廷歌人のあり様を示していると思われる。

と述べ、海人娘子への憧憬は行幸に従駕する官人に共通する感情であり、その共通性こそが行幸歌としての讚歌性に繋がるとした。これをさらに進めたのが梶川信行氏であろう。

それは呂美頓宮での宴席で、目前に海を隔てて見える、あるいは見えた「淡路島松帆の浦」という地名を契機として

つ、旅先でしばしば行われた架空の恋物語であり、座興として従駕官人たちの無聊を慰めるためのものであったと考えるのである。（略）すなわちこの歌は、金村の行幸従駕歌の中でも国土賛美的なものではなく、悲恋物語的な歌の作品系列に属するものであった。

と、当該歌を仮構の娘子との架空の恋物語であり、座興の歌と捉える。梶川論では、そのような作歌が行幸従駕歌として意味をなすかという議論とともに、論が第一反歌までの範囲で終結し第二反歌の解釈に触れていないことが問題点として残る。

その後、官人の海人娘子への憧憬心を天皇による妻まぎの「もどき」と捉える村山出氏、「見えない娘子」も景の一部と捉える倉持しのぶ氏が、梶川論をふまえて、それでも行幸従駕歌としての意義づけを試みているが、いずれも官人たちの海人娘子への思いを行幸歌としての讚歌性とうどう関連づけるかに論点を置くものとなっている。

海人娘子は眼前の「見える景」に包括してなお国土讚美の対象とすべき「見えない景」なのか、またはすでに国土讚美の伝統を離れ、相聞的要素によって行幸の宴の座興におさまるべきものなのだろうか。そこで歌の表現に立ち戻ってみると「海人娘子が見えない」のではなく「見に行きたいけれど行かれない」のであり、最終的に賞美されているのは、足元の浜に寄せ来る波である。そこにこそ注目して問い直すべきであろう。次節では海人娘子の原義を確認することから当該歌の行幸歌としての意味を考えていく。

三 海人娘子とは―「ありとは聞」く海人娘子

そもそも「海人」と「娘子」が結合した海人娘子とは何ものだったのか。「海人」は、

網引する海人とか見らむ飽の浦の清き荒磯を見に來し我れを
 (⑦二一八七・人麻呂歌集)

潮早み磯廻に居れば潜きする海人とや見らむ旅行く我れを
 (⑦二二三四・古集)

などと詠まれ、都人にとって旅の途上で目にする異境の人であつた。「私を海人と見るだろるか」という背景には、そうは見られたくないという感情が見て取れよう。海人を異質なものと見做し軽侮さえ含む語感が感じられる。

あさりする海人の子どもとは言へど見るに知らえぬ貴人の子と
 (⑤八五三)

と旅人が詠むのも、「海人」が貴人の対極にある存在であつたことを示している。

「をとめ」(「娘子」をはじめ何種かの漢字表記がある)については、折口信夫氏によると、

Wotoは、復活する・元に戻るの義で、常に交替して神事に奉仕する男子・女子が、Wotko, wotome なのであつた。

とされ、「をとめ」がその原義において神聖性を内包することがわかる。また「をとめ」とは、その若さや容姿が美と捉えられ、姿を見たいと希求される存在であつた。

以上をおまえると、「海人」が「娘子」という語と結びついた時「娘子」が本来的に持つ神聖性が付与されたと考えてよい

のではないか。それにより「海人娘子」は旅の景の一部として異郷性を感じさせ望郷の念を思い起こさせるといふ要素に加え、旅先で見るべき存在としてクローズアップされてくる。讃歌で取りあげられ詠まれるべき存在となるのである。

「海人娘子」は万葉集中に二〇例を数える。そのうち作者や題詞から年代が特定できるのは十六例あるが、第一期に属するものが一例のみであとはいずれも三期、四期の例である。羈旅歌に詠み込まれるのがほとんどであるが、軍王(①五)金村(当該歌の他⑥九三〇)福麻呂(⑨一〇六三)の歌は行幸歌である。その十六例中の四例、行幸歌五例中の三例が金村の作品である。軍王の例が序詞の中で使用であることも考えると、金村のこの語に対する関心の高さと意識的な使用の様子がうかがえる。金村の当該歌以外の二例をあげる。

海人娘子 棚なし小舟漕ぎ出らし旅の宿りに楫の音聞こゆ

(⑥九三〇・冬十月幸于難波宮時反歌)

…ますらをの手結が浦に 海人娘子 塩焼く煙 草枕 旅にしあればひとりして見る験なみ…

(③三二六六・角鹿津乗船時)

楫の音によつて認識される海人娘子と旅の景の一部としての海人娘子を詠んだものであり、その姿は直接見えないにしても他の手段で確かに存在することが確認される。これは次のような、塩焼く、玉藻刈る、舟出するなど姿が見えると詠んだり、楫の音などで存在を認識する万葉集中の「海人娘子」の詠まれ方と共通する。

海人娘子 玉求むらし沖つ波長き海に舟出せり見ゆ

あり通ふ難波の宮は海近み海人娘子らが乗れる舟見ゆ
 (⑥一〇〇三・葛井大成)

楫の音ぞほのかにすなる海人娘子沖つ藻刈りに舟出すらし
 も
 (⑦一一五二)

あさりする海人娘子らが袖通り濡れにし衣干せど乾かず
 (⑦一一八六)

その中で注目したのは、次の一首である。
 これやこの名に負ふ鳴門のうづ潮に玉藻刈るとふ海人娘子
 ども
 (⑮三六三八・遣新羅使)

この歌では「海人娘子」の姿が実際に見える、或いはその存在が他の手段で確認されることを問題としていない。「鳴門のうづ潮に玉藻刈るとふ」と、対象が未見であっても伝聞によってその存在が既知であり、旅先にあるべき、見るべきものとして捉えられている。これは、次のような語り継がれる「娘子」のあり方を想起させる。

いにしへにありけむ人の倭文幡の帯解き交へて 伏屋立て妻問ひしけむ 勝鹿の真間の手児名が奥つ城をここと
 は聞けど…
 (③四三二・赤人・過勝鹿真間娘子墓時)
 鶏が鳴く東の国に古へにありけることと今までに絶えず言ひける勝鹿の真間の手児名が…

(⑨一八〇七・高橋虫麻呂歌集・詠勝鹿真間娘子)
 これは土地の言い伝えによりその存在が確信される所謂「伝承の娘子」を詠む歌である。それは伝説の、理想化された娘子であり、勿論目前にしていけない（もはやすることはできない）け

れど、その地にゆかりの娘子を歌に詠むことこそが重要なのである。

金村は、淡路の松帆の浦に理想の海人娘子がいると、あたかもそういう伝承があつたかのように設定したのである。その海人娘子には会いに行かれない。しかし、決して手の届かない位置に置くことで、伝承の娘子に重ねて海人娘子の聖性を高めているとみてよいと考える。そうとすれば、「ありとは聞けど見に行かむよしのな」「海人娘子」を詠むことは、単に鄙の風物を詠むことを旅（行幸）の風流と捉えるにとどまらない、金村の新しい讚美表現の一つと位置付けることができるのではないだろうか。

四 「海人娘子」のいる場所

次に、「海人娘子」がいるとされる淡路の松帆の浦は、どのような場所として設定されたのかを考えていきたい。金村の作歌以外で海人娘子が詠まれた歌として注目される歌に次の歌がある。

娘子らが麻笥に垂れたる 続麻なす 長門の浦に 朝なぎに 満ち来る潮の 夕なぎに 寄せ来る波の その潮の いやます ますに その波の いやしくしくに 我妹子に 恋ひつつ来れば 阿胡の海の 荒磯の上に 浜菜摘む 海人娘子らが うながせる 領布も照るがに 手に巻ける 玉もゆららに 白袴の袖 振る見えつ 相思ふらしも
 (⑬三二四三)

この歌では、海人娘子の描写（服装）が、神仕えをする者のように描かれている。そこで注目したのは、窪田『評釋』の説

である。

海人の女の如何なる者であるかは、金村は知らぬはずはなく、又さうした者は松帆の海まで渡らずとも名寸隅の邊りにもゐたことであらう。それを松帆の浦の海女に限つて懂れ、この種のものとしては適はしくない長歌にまでしてゐるのは、そこに何らかの理由があつてであらう。強ひていへば、當時知識階級に盛行してゐた神仙思想からの聯想で、海を越しての彼方の島に住んでゐるといふ海未通女が、仙女であるかのやうな想像を起こしたのではないか。それ程ではなくても、未見の女を、未見であるが故に空想化し、仙女をその空想の資料として、強い懂れを起したのではないかと想像される。

と、海人娘子と仙境の繋がりを指摘しているのは慧眼といえよう。

虫麻呂歌集の「詠水江浦嶋子」には、「海人娘子」の語は登場しないものの、海の彼方に「海神の神の娘子」の住む常世があるとする。

…水江の浦島の子が鰹釣り 鯛釣りほこり 七日まで 家にも来ずて 海境を 過ぎて 漕ぎ行くに 海神の 神の娘子にたまたまかに い漕ぎ向ひ 相とぶらひ 言成りしかば かき結び 常世に至り 海神の 神の宮の 内のへの 妙なる 殿に…

(①一七四〇)

また、旅人は「遊於浦河序」で「余以暫住松浦之縣逍遙 聊臨 玉嶋之潭遊覽 忽值釣魚女子等也」と述べ、

君を待つ松浦の浦の娘子らは常世の国の海人娘子かも

(⑤八六五・旅人)
と、仙境である常世に「海人娘子」がいると詠む。すなわち、「海人娘子」がいる場所とは、海の彼方に設定される常世であるという考え方があつたことがわかる。漢詩の世界でも「高唐賦」や「神女賦」において、遠い川のはとりに神女が住むと設定されていることとも通底する。

当該歌にそくしてさらに確認するならば、大浦誠士氏は、人麻呂釋旅歌八首(③二四九―二五六)についての論考の中で「敏馬」「野島の埼」という地名をとりあげ、両者が明石海峡を隔てた地であることから、明石海峡の持つ境界としての意味の重要性を指摘している。明石海峡は畿内と畿外の境界ということであるが、まさに畿外へ出たばかりの地、印南野から明石海峡を隔てた淡路島を見やる時にも、その境界性は意識されたであろう。当該歌の淡路島は、一種の異境として捉えられたと考えられる。

また時代は下るが、淡路島のイメージを表す歌として次のような例を押さえておきたい。

わたつづみの挿頭にさせる白妙の波もてゆへる淡路島山
(古今①⑦雑歌上九一―)

「挿頭」という語からは神事に関わるイメージが看取される。やはり、淡路島がある種の聖地として認識されていたことを物語るものであるといえよう。

五 「名寸隅の舟瀬の浜にしきる白波」

海人娘子がいるとされた場所が常世と設定され、淡路の松帆

の浦がそのように見做されたことを確認したうえで、あらためて第二反歌（九七三）の意味を考えたい。「名寸隅の舟瀬の浜に寄せる白波」を「見とも飽かめや」「見飽きることはない」と詠む。その詠みぶりだけでも景の賞美になるが、ここではその波が海人娘子のいるとされる淡路島から寄せていることが重要な意味を持つてくる。

万葉集中では、波は次のように詠まれている。

荒磯越す波を畏み淡路島見ずか過ぎなむここだ近きを

（⑦一一八〇）

大海の波は畏ししかれども神を齋ひて舟出せばいかに

（⑦一二三三・古集）

伊勢の海の磯もとどろに寄する波畏き人に恋ひわたるかも

（④六〇〇・笠女郎贈家持）

神さぶる荒津の崎に寄する波間なくや妹に恋ひわたりなむ

（⑮三六六〇）

ま幸くて妹が齋はば沖つ波千重に立つとも障りあらめやも

（⑮三五八三）

「畏し」は魂を揺さぶる靈威を感じさせるものとして、「寄す」は離れたところから寄せることで、何かを運ぶものとして、「立つ」は靈威を奮い立たせるものと読み取ることができよう。保坂達雄氏は、

あみの浦に船乗りすらむをとめらが玉裳の裾に潮満つらむ
か

（①四〇〇・人麻呂）

について、この時の伊勢國行幸での舟遊びや女官たちの浜辺の遊びが、常世波の靈威を身に着ける呪的な意義を持つと解し

た。行幸において波を詠む意味について、当該歌につながる重要な示唆を与えていると考える。

当該歌の波が、「行き廻り見とも飽かめや」と詠まれるのは、行幸歌や羈旅歌における国土讚美の表現として常套的に用いられた「見れど飽かぬ」をふまえた讚美表現であることは言うまでもない。当該歌では「船瀬の浜にしきる白波」と、しきりに寄せる波そのものが賞美の対象となっている。靈力を帯びた波が次々に寄せている場所がまさに行幸の地としての「名寸隅の船瀬の浜」なのであるが、波が絶えず重なり合って寄せてくるのは、波の持つ力があふれるばかりに増幅されていることを示している。さらには、波が寄せる場所である行幸の浜の神聖性、めでたさも増幅することになる。

靈力あふれる波がどこから寄せているのかと視線を写してみれば、対岸は淡路島の松帆の浦である。海人娘子のいるとされた淡路の松帆の浦と、足元の名寸隅の船瀬の浜は、寄せ来る波によって一つに繋がれたのである。

「海人娘子を見に行きたいが行かれない」と歎き、一見未完を装った名寸隅の浜の景は、その「たどりつけなさ」によって聖性を獲得した対岸の景と白波で繋がれることで、めでたさを増し、いわば景として完成する。そして、そこで生み出された歌は、行幸従駕にふさわしい讚歌として充分に成立していると考えるのである。

六 むすびにかえて

笠金村の「印南野行幸歌」は、従来述べられてきたような、

眼前の「見える」景に「見えない娘子」も包括して一つの景として讚美する歌や、娘子に対する思慕の情を詠む行幸の宴の座興の歌とは考えにくい。

「変成」というテーマに引きつけていえば、淡路島松帆の浦は、海人娘子の居る場所として設定されることで、異境・常世と認識されることとなった。淡路島は、もともと都びにとつて畿内・畿外の境界性をもった特別な場所であったが、「海人」の語に付与された「娘子」の神聖性に加え、所謂伝承の娘子のイメージも反映して歌に詠むべき特別な場所への「変成」がもたらされたということができよう。

それに加えて、寄せ来る波によって海人娘子のいる場所と繋がれた名寸隅の浜も行幸の景として完成したのものとなった。それによってそこで詠まれた当該歌は、行幸従駕の歌として十分に意義付けることができると考えられる。海人娘子の存在は、彼岸のみならず此岸にも第二の「変成」をもたらしただといつてよいであろう。

このような、一つの言葉の設定が「変成」を導引し、さらにそれが次なる「変成」を惹起するという仕掛けを内包した金村の行幸歌は、新しい讚美表現を作り上げていたのだと結論づけることができるかと考察するものである。

注(1) 清水克彦「笠金村論」『万葉論集第二』桜楓社 一九七二年二月

(2) 村田正博「印南野行幸時の歌」『万葉集を学ぶ 第四集』有斐閣 一九七八年

(3) 清原和義「み吉野の瀧・玉藻刈る海人娘子」『万葉・その後』塙書房 一九八〇年五月

(4) 梶川信行「対岸の娘子—印南野従駕歌」『万葉史の論』笠金村「桜楓社 一九八七年十月

(5) 村山出「笠金村の印南野従駕歌」『国語国文研究』一三〇号 二〇〇六年八月

倉持しのぶ「海人娘子ありとは聞けど」—笠金村「神亀三年の印南野行幸歌」についての考察—『叙説』二〇〇〇年三月

(6) 折口信夫「万葉集研究」『折口信夫全集』第一卷 一九七五年九月 中公文庫

(7) 「をとめ」とはどういう存在かについては、拙稿「万葉集の「をとめ」・「をとこ」考」『フェリス女学院大学大学院紀要』第11号 二〇〇四年三月で考察した。

(8) 窪田空穂『万葉集評釋』

(9) 大浦誠士「人麻呂羈旅歌八首の周辺」『万葉集の様式と表現 伝達可能な造形としての「へ心」』笠間書院 二〇〇八年六月

(10) 保坂達雄「海の行事と留守官の歌」『神と巫女の古代伝承論』岩田書院 二〇〇三年三月